船川遺跡（第2次）行田市

［ 立地と環境 ］

船川遺跡は、利根川右岸に位置し、秩父鉄道武州荒木駅から北北西約3㎞の行田市大字須加に所在する。妻沼低地から加須低地に広がる沖積地の中に形成された自然堤防上に立地する。

船川遺跡の周辺では、遺跡南側に大稲荷古墳群がある。径約20ｍの円墳である浅間塚古墳が現存しているが、多くの古墳は削平されている。昭和44年に2基の古墳が調査され、1号墳は径26ｍの円墳で、弧を描いた円筒埴輪列が出土し、6世紀初頭の築造とされている。2号墳は1号墳の南東57ｍの水田下より、石室と見られる細長い礫が複数検出された。中から大刀、鉄鏃、刀子、轡が出土し、5世紀末の時期とされている。

調査区全景（西から）

遺跡東側の利根川下流にある砂原遺跡では、令和4、5年度に発掘調査が行われ、古墳時代や飛鳥時代、奈良・平安時代の竪穴住居跡や、中・近世の土壙、溝跡等が検出された。

利根川上流側の立野遺跡では、縄文時代のピットや遺物包含層、古墳時代の方形周溝墓、平安時代の竪穴住居跡や土壙、中・近世の井戸跡や溝跡等が検出された。また立野遺跡近くの酒巻古墳群では前方後円墳3基、円墳20基の計23基の古墳が確認されている。

船川遺跡と砂原遺跡の間の行田市立須加小学校跡地や長光寺付近は、須加城跡とされている。『鎌倉九代後期』や『鎌倉大草子』などには「宿城」と記載があるものの、築城や廃城の年代は判然としない。

［ 発見された遺構 ］

今回の調査で発見された遺構は、奈良・平安時代の竪穴住居跡、土壙、性格不明遺構、中世の井戸跡、溝跡、時期不明の土壙、溝跡、性格不明遺構、ピットが検出された。遺構番号は、第1次調査から継続して付した。

奈良・平安時代

竪穴住居跡で全体が確認できたのは2軒である。第1号住居跡は、北西側と南東側の壁の各々からカマドが検出された。南東側のカマドは大きく、壁や天井部が厚く焼土化し、土師器羽釜や須恵器坏が出土した。

第5号住居跡は、北側壁にカマドが検出され、焼土化した天井部が遺存していた。土師器甕、須恵器坏が出土した。

第5号住居跡

中世

井戸跡からは13世紀から14世紀の青磁及び常滑焼、瀬戸焼、渥美焼の陶磁器・片口鉢が出土した。

第2号溝跡は、調査区東側を東西に走る。検出された長さ7・2ｍで、東端が調査区外へ延びる。第3号溝跡は第2号溝跡の西側に位置し、東西に約4・0ｍ延び、北に直角に曲がり約2・0ｍで立ち上がる。14世紀代と考えられる土器が出土した。

［ まとめ ］

第2次調査では、奈良・平安時代及び、中世の遺構・遺物が検出された。

奈良・平安時代の竪穴住居跡から出土した遺物は、いずれも少量であった。3軒の住居跡からカマドが検出され、燃焼部や煙道部の焼土化が確認された。この遺跡では、竪穴住居跡の発見が初めてであり、貴重な発見と言える。

中世は、井戸跡と溝跡が検出された。第1次調査でも中世の火葬跡や井戸跡が見つかっており、中世の未知の集落の存在が明らかになり、貴重な発見となった。

土器集中部

■ 所在地
行田市大字須加4464－1他
■ 実施期間（事業者）
令和５年４月～令和５年９月
（国土交通省関東地方整備局）
■ 調査面積
620.80 ㎡
■ 遺跡の種別
集落跡
■ 主な遺構
奈良・平安（住居跡６・土壙８・性格不明遺構１）
中世（井戸跡３・溝跡２）
時期不明（土壙１・溝跡１・性格不明遺構１・ピット３）

平右衛門遺跡（第5次）鴻巣市

■ 所在地
鴻巣市大字箕田字平右衛門3619番地11他
■ 実施期間（事業者）
令和５年８月～令和６年１月（国土交通省関東地方整備局）
■ 調査面積
937.43㎡
■ 遺跡の種別
集落跡
■ 主な遺構
第19地点
縄文（土壙1）、古墳（住居跡4）、中・近世（土壙2・溝跡2・ピット8）
第20地点
中・近世（土壙66・ピット179）
第21地点
古墳（住居跡1）、奈良・平安（住居跡4）、中・近世（土壙64・井戸跡2・溝跡1・ピット69・性格不明遺構1）

［立地と環境］

平右衛門遺跡は、ＪＲ高崎線北鴻巣駅の南東約２kmの鴻巣市箕田に所在する。標高約16ｍの大宮台地上の遺跡である。遺跡が所在する大宮台地は、遺跡周辺では北西方向へ半島状に延び、東側に元荒川、西側に荒川が流れている。周辺の遺跡はこの大宮台地や元荒川の自然堤防上に立地している。

平右衛門遺跡周辺の遺跡は、旧石器時代では大宮台地上の鴻巣市新屋敷遺跡からナイフ形石器や尖頭器のほか、石器集中地点や礫群が見つかっており、市内で最もまとまった資料である。

縄文時代では、草創期の遺跡として、中三谷遺跡から有舌尖頭器、また富士山南遺跡から爪形文系土器が出土したが、遺構は明らかになっていない。早期は遺跡数が増加し、中三谷遺跡で押形文系土器、赤台遺跡では条痕文期の竪穴住居跡や炉穴群が見つかった。中期は集落も増加し、赤台遺跡、馬室小校庭内遺跡、新屋敷遺跡等で加曽利E式期の集落が営まれる。続く後期も赤台遺跡で称名寺式期の、中三谷遺跡で堀之内式期の竪穴住居跡群が発見された。

弥生時代の遺跡は極めて少ない。登戸新田遺跡から吉ケ谷式期の方形周溝墓、九右衛門遺跡から終末期から古墳時代前期にかけての集落跡が見つかっている。

古墳時代になると遺跡数は急激に増加する。宮前本田遺跡、大間原遺跡、馬室小校庭内遺跡、赤台遺跡、新屋敷遺跡、中三谷遺跡等、前期の集落が確認できる。中でも中三谷遺跡は、古墳時代後期以降まで続く集落である。古墳時代後期になると、箕田古墳群や新屋敷遺跡等で大規模な古墳群が形成される。生出塚遺跡や馬室埴輪窯跡といった埴輪窯の開窯もこの頃である。生出塚遺跡は竪穴住居跡、埴輪窯跡、工房跡、粘土採掘坑等も確認された工人集落で、埴輪製作跡の様相が明らかになっている。この地で製作された埴輪は、埼玉古墳群や周辺の笠原古墳群等に供給されたことが明らかになっている。

奈良・平安時代には、遺跡数が減少する。古墳時代の集落から継続する宮前本田遺跡や赤台遺跡、中三谷遺跡等が認められる。

中・近世の遺跡としては、城館跡として箕田地区の箕田館跡や糠田地区の安達館跡のほか、大間地区の源経基館跡等が知られている。箕田館跡推定地である九右衛門遺跡では、詳細な時期は不明なものの、大型の堀跡や中世陶磁器類が多量に出土した。また、中三谷遺跡では「コ」の字状に巡る堀跡が、新屋敷遺跡でも二重の堀跡が見つかり、中世の館跡と推定されている。このほか、平右衛門遺跡に近い宮前本田遺跡では、中・近世の掘立柱建物跡や井戸跡、地下式坑や溝跡が確認されており、周辺に館跡の存在が推定されている。

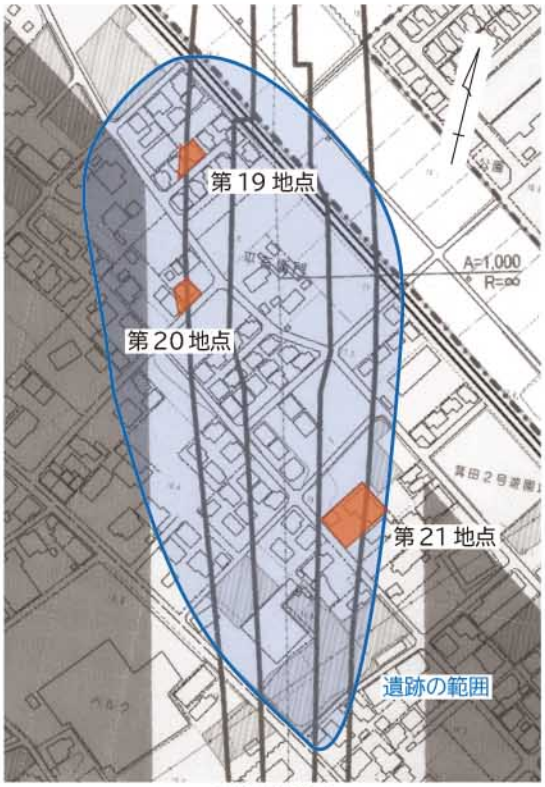
［発見された遺構］

平右衛門遺跡第5次調査では、北から順に第19地点、第20地点、第21地点の3地点を調査した。第19地点では、縄文時代、古墳時代、中・近世、第20地点では中・近世、第21地点では古墳時代、奈良・平安時代、中・近世の遺構が検出された。

第19地点

調査区南半は、住宅の基礎に伴う攪乱が著しく、遺構の残存状況は良好ではなかった。

縄文時代の土壙は、調査区中央からやや北東の位置で見つかった。直径約0・6ｍの円形で深さ約0・2ｍの掘り込みであった。



調査区位置図

第19地点 調査区全景

古墳時代の第1号住居跡は、調査区の東隅、第2・4号住居跡は調査区の南隅、第3号住居跡は調査区中央からやや北西の位置で検出された。攪乱されるか、または調査区外に続くため、全体の規模・形状がわかるものはなかった。第3号住居跡は、遺存状態は良好ではなかったものの、カマドの一部と貯蔵穴が検出され、貯蔵穴周辺から土師器の甕が出土した。

中・近世の遺構は、調査区東側で重複して検出された土壙2基である。そのうち、第1号土壙は、長軸が北東-南西方向に向く長方形の掘り込みである。内部から中世の銭貨が出土し、土壙墓と推定される。溝跡2条はそれぞれ、第1号溝跡が第10地点の第1号溝跡、第7号溝跡が第11地点の第7号溝跡から続く遺構である。第1号溝は幅4m程で、深さは第7号溝跡と同じ1・4m程である。この二つの溝跡は、走行方向から互いに交わると推定される。掘り込みの形状と互いの位置関係からL字に屈曲、ないしは交差する可能性が高い。新旧関係は確認できなかった。

第20地点 調査区全景

第20地点

攪乱が著しく、遺構の残存状況は良好ではなかった。

調査区の全面にわたりピットが検出されたが、掘立柱建物を構成する柱穴は確認できなかった。第25号土壙と第31号土壙は深さが1m以上あり、地下式壙と推定される。調査区中央よりやや西側で検出された第51号土壙は、長軸が北西-南東方向に向く長方形で、中世の銭貨が出土したことから、土壙墓の可能性がある。

第21地点

古墳時代の第2号住居跡は、調査区南端で検出され、南半は調査区外に続き、全体の規模は不明である。一辺6m程の比較的大型の住居で、カマドは北東に造られている。カマドの遺存状態は良く、ソデには、底部を欠いた土師器甕2個体が逆さまに積み重ねられた状態で、構築材として再利用されていた。カマド周辺から多くの土器が出土したほか、主柱穴の覆土中から土師器坏が1点出土した。

第21地点 調査区全景

奈良・平安時代の調査区西隅で重複して検出された住居は、第4地点1a・1b号住居跡の南半部である。そのほか、第1号住居跡は調査区北西側、第3号住居跡は東側、第4号住居跡は南側で検出された。第1号住居跡は、一辺4m程の方形で、カマドは北西に造られる。覆土は浅く、遺存状態は良好ではないが、カマドの周辺から須恵器坏が出土した。

中・近世の遺構は、調査区北東から南西方向にかけて、溝状の土壙群が2列並んで検出された。遺物はほとんど出土せず、詳細な年代は不明である。第21地点のピットの多くはこの溝より南東側で検出されたが、掘立柱建物跡を構成する柱穴は確認できなかった。第17号土壙は、調査区中央よりやや西側で検出され、長軸が北東-南西方向に向く長方形の掘り込みである。深さは検出面から1・5m以上あり、ローム質の黄褐色土と黒褐色土で互層に埋め戻されていた。遺物はかわらけが出土した。第31号土壙は、第3号住居跡の南側に接して検出された。楕円形の掘り込みで、深さは2m以上と推測される。覆土から板碑や石製品の破片と見られる緑泥片岩や砂岩が多く出土した。

［まとめ］

縄文時代では、第19地点で当該期と推定される土壙が1基検出されたのみである。第21地点では、遺構の覆土から縄文時代前期の土器片が数点出土したが、明確な遺構は認められなかった。

古墳時代から奈良・平安時代は、第19地点と第21地点で竪穴住居跡が数軒確認され、周辺の調査区からもこの時期の住居跡が検出されている。北側に元荒川低地を望む集落が、台地の縁辺部から中央部に広がっていたと考えられる。これまで平右衛門遺跡周辺では、同時期の集落跡の調査例は少ない一方で、近隣には箕田古墳群といった古墳なども分布している。この地域における古墳の造営や人々の生活の歴史を復元する上で、貴重な成果となったといえる。

中・近世に関しては、第19地点の溝跡は、平右衛門遺跡の過去の調査区で検出された大溝から連続するものである。なかでも第1号溝跡は、100m近い規模であり、台地の縁辺部に造られた館の堀跡と考えられる。

第19地点では、遺構として確認はできなかったが、南北方向（第7号溝跡）と東西方向（第1号溝跡）の2条の大溝の交差が推定された。こうした溝跡は、周辺でみつかった土壙や井戸などと含めて、方形区画の範囲と考えられ、館の存在が推定される。

第21地点 第2号竪穴住居跡
カマドソデ土器出土状況

宮前遺跡（第3次）鴻巣市

■ 所在地
鴻巣市大字宮前字本田339－2番地他
■ 実施期間（事業者）
令和５年４月～令和６年３月（国土交通省関東地方整備局）
■ 調査面積
3,100㎡（発掘調査）＋4,600㎡（表土掘削）
■ 遺跡の種別
集落跡
■ 主な遺構
縄文（住居跡４・焼土跡４・土壙71・遺物包含層１）
古墳（住居跡１）
奈良・平安（土壙１）
中・近世（掘立柱建物跡３・土壙57・井戸跡６・溝跡１）
時期不明（ピット200）

［　立地と環境　］

宮前遺跡は、鴻巣市大字宮前字本田に所在する。標高約15ｍ～18ｍの台地に立地し、西に荒川が南流する。調査区南側は、戦後の造成により平坦な地形となっているが、それ以前は、荒川によって形成された氾濫平野（低地）であった。近世以前は沼沢地であった。現在も湧水があり、市の水源地が置かれている。

遺跡は昭和51年（1976年）に、「古墳から奈良・平安時代の大規模な集落遺跡」として埼玉県重要遺跡に選定されている。周辺には、台地縁辺部に縄文時代から近世にかけての遺跡が分布する。登戸新田遺跡では、縄文時代後期初頭から前葉の遺物が、宮前本田遺跡、宮前本田北遺跡からは縄文時代中期後半の遺物が出土している。宮前本田遺跡では、８世紀初頭の竪穴住居跡が１軒検出された。

本遺跡の第１次、２次調査では、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世の遺構が検出された。

遺跡全景

［　発見された遺構　］

第３次調査では、第２次調査に引き続き、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世の遺構が検出された。

調査区は北から南に向かって傾斜しており、遺構の分布、地質や環境が異なる。そのため、高所の北側を「台地」、低所の南側を「低地」、「台地」から「低地」へ移行する部分を「台地縁辺」と呼称する。

昨年度から継続し、第２地点の調査を行った。検出された遺構は、縄文時代が竪穴住居跡、焼土跡、土壙、遺物包含層、古墳時代が竪穴住居跡、奈良・平安時代が土壙、中・近世が掘立柱建物跡、土壙、井戸跡、溝跡である。また、時期不明のピットが多数検出された。

第３地点は表土掘削のみを実施した。

縄文時代の遺構は、いずれも後期初頭から中葉（約4400～3500年前）の遺構と考えられる。竪穴住居跡の壁はやや不明瞭で、炉跡と柱穴が確認できたものが１軒、他の３軒は炉跡と考えられる焼土跡と柱穴の確認から、住居跡と判断した。土壙は、台地から台地縁辺にかけて71基が分布していた。特に第153号土壙は、径2・6ｍ、底径3・4ｍ、深さ2・0ｍにも及び、底面中央に小さなピットが検出された。低地部分には土器を含んだ遺物包含層が堆積し、焼土跡６箇所が認められた。出土した土器は、上層では縄文時代後期中葉のものが主体で、中層では前期前葉から後期前葉のものが多

第153号土壙 土層断面

第156号土壙

い。下層には草創期から早期の遺物が含まれていた。草創期の爪形文土器は、全国的にも発見例が少ないものであり、低地の谷底から検出されることも珍しい。

古墳時代の遺構は、台地縁辺から竪穴住居跡1軒が検出された。

奈良・平安時代の遺構は、台地上から土壙1基が検出された。

中・近世の遺構は、台地上で掘立柱建物跡3棟、土壙57基、井戸跡6基、低地の埋没土壌中から溝跡1条が検出された。溝跡は昨年度検出された第1号、第2号溝跡などに連続し、方形の区画を構成した館の堀跡である可能性が考えられる。

［ 編組製品の記録作業 ］

令和4年度、第2地点で出土した編組製品について、三次元写真測量記録を作成した。終了後、材質の同定と年代測定のため自然科学分析を実施し、運搬を可能にするため固定処理を行った。固定処理は強化剤の水溶液を編組製品に浸透させた。編組製品の下部に付着している粘土がかなり強化され、編組製品自体に含まれている水分も半分程度強化剤に置換された。

［ まとめ ］

縄文時代については、台地上から木の実や根菜類の貯蔵施設であると考えられる土壙が、低地に望む台地の縁辺部から住居跡がそれぞれ集中して検出された。縄文時代後期の典型的な土地利用を示す集落形態である。

低地部分では黒色土が厚く堆積し、台地上では見られなかった縄文時代各時期の遺物が検出された。最下層からは、縄文時代草創期の爪形文土器が検出され、縄文時代開始直後から土砂の流入による谷の埋没が始まったと考えられる。下層からは早期撚糸文期から条痕文期までの土器片が見つかり、断続的に周辺部での活動が想定される。下層から中層にかけては前期前半の土器が少量検出され、中葉から後半の土器は見られなくなることから、当該期には居住域としては利用されていないようである。中期になってもこのような傾向は継続する。後期になって再び周辺地域での活動が活発化し、上層から後期初頭の土器片が少量、前葉の土器片が多量に検出され、後期前葉で最盛期を迎えている。後期中葉になると再び遺物が少なくなり、縄文時代の遺物はこの時期で途絶える。

古墳・奈良・平安時代については、過去2年間の調査と合わせると、台地から台地縁辺では、竪穴住居跡は重複やカマドの付け替えが多く、継続して集落が営まれていたことが明らかとなった。

中・近世については、昨年度検出された大溝に連続すると考えられる溝跡が、低地の埋没土壌中から検出された。大溝で区画された内側からは、かわらけを大量に出土した土壙、井戸跡、地下式坑が検出されていることから、館の可能性が高いと考えられる。

調査区全景（低地）

第107号住居跡 遺物出土状況